

フランス革命の恐怖政治を読み直す

—暴力と政治闘争—

ジャン＝クレマン・マルタン（翻訳：山岸 拓郎）

Relire la Terreur de la Révolution française, violence et luttes politiques

Jean-Clément Martin

La définition de la Terreur pose toujours question. La communication traitera de la "grande terreur", de l'été 1794, habituellement liée à la promulgation de la loi de prairial réorganisant la procédure du tribunal révolutionnaire. Robespierre, plus que Saint-Just sans doute, cristallise les craintes d'une "dictature" césariste et devient l'objet d'une conjuration complexe, qui passe par l'instrumentalisation de la répression. Dans un amalgame de manoeuvres et d'arguments puisés dans des registres divers, Robespierre perd les moyens de contrer l'opposition qui s'organise contre lui et qui le rend responsable des multiples mises à mort parfois spectaculaires qui ont lieu à ce moment. Le souci d'unifier des lois répressives accumulées au fil des luttes entre Convention, comités de gouvernement, commune de Paris et sections, a déclenché autour de la personnalité d'un homme ou de deux, une crise dont la signification non contrôlée a pris une ampleur considérable au point de provoquer une réorientation de la politique du pays tout entier. C'est à cette explication des mécanismes politiques que la communication est vouée pour rappeler la complexité des faits les plus bruts, que les querelles historiographiques risquent de minorer.

はじめに

恐怖政治はフランス革命史のなかで、またフランス史のなかでも依然としてもっとも重要なテーマのひとつである。その犠牲者の数が、政治上および制度上の成果と比べられ、両者を差引きした結果が明らかに強調されたうえで、通常は、そこから革命期が判断されている。200年来、この問題は絶えず提起されてきた。とりわけ1794年5月、6月そして7月の3ヶ月間にわたる「大恐怖政治」と一般に呼ばれるものが強調されてきた。この短期間のエピソードの中心には、ロベスピエールという謎めいた人物が立ちはだかっている。

私にとって今回のシンポジウムは、この議論を再開する良い機会である。私は、実際に起こっ

たことをできるだけ厳密に明らかにしようと思う。つまり、政治闘争の細部における何人もの登場人物たちの日々の動きに目を配る。このやり方は人を驚かすかもしれないが、大恐怖政治について話す前に、当時は使われていなかったこの言葉が、正確に何を包含しているかを知る必要があるように思われる。実にすべての歴史書が、一致して1794年のこの3ヶ月を大恐怖政治の時期として描写しているにもかかわらず、恐怖政治に関する他の全ての概念規定については意見を異にしているのであり、いつそれが始められたのかさえ分からない（1793年9月、1794年5月、1793年3月、さらには1789年7月とする説もある）⁽¹⁾ということを強調しておこう。

この報告は、暴力と恐怖政治をめぐるより広範な省察の枠組みのなかで⁽²⁾、歴史叙述のあらゆる側面を相互に結びつけるようなひとつの読み方を提示するために、この3ヶ月間に専心する。それは、権力の実態、個人あるいは集団の軌跡のみならず、党派的な捏造さえも考慮に入れるものである。この読み方は、とりわけ歴史書の盲点を衝くことを望んでいる。その盲点というのは、みかけはよく知られているが、詳細に検討するとそれほどわかっているわけではない、1794年の5月と6月である。B・パチコとF・ブリュネルの著作は、テルミドール九日を説明し、それがもたらした断絶を強調したけれども、自分たちが結果を明らかにしたプロセスの始まりを十分に説明しえてはいない。

諸々の出来事は、実に多くの意味や象徴に満たされている。そこであらかじめ付け加えておくが、私は生じたことに対するなんらかの道徳的判断もイデオロギー的判断も示すつもりはない。また、犠牲者の数やそこから引き出されるべき教訓に関する議論にも参加しない。このテーマにまつわるこうした重要な諸側面は無視できるものではないし、いわんや否定されるものでもない。しかし、それらは、この報告のなかでは重要な役割を演じない。結局のところ、思想や観念や概念の歴史は、歴史の当事者たちの期待や要求を理解するためには不可欠だが、実際に体験されたことの複雑さを説明するのにどうしても十分ではないよう私には思われる。政治的駆け引きは存在したのだから、反革命的な告発に終始することなく、また、すべてを政治的駆け引きに還元することのないよう心掛けながら、それにふさわしい場所を与えなければならない。なぜならば、統治の実践という現実のなかで政治的駆け引きは、歴史家にとって、もし必要とあらば歴史書の慣わしと関係を断ってでもそれを考慮に入れなければならないほどの位置を占めているからである⁽³⁾。

1. 恐怖政治という言葉

言葉の使い方はまさに予期しなかったことを示すという点を手始めに指摘しておこう。歴史書のなかではしばしば忘れられる反革命派を含むあらゆる政治集団が、同じ暴力の言葉を用いていたにもかかわらず、誰もシステムとしての恐怖政治に頼ることはなかった。バレールが、過ぎ去った時期を指し示すために「恐怖政治の体制」について語ったのは、テルミドール11日（1794年7月29日）になってからである。この表現がタリヤンによって繰り返されるのは、フリュクチドール11日、したがってロバスピエールの死後ひと月たってからである。その表現が、この語の意味を今日まで定着させる。敵を恐怖させなければならないということが絶えず言われたにしても、

恐怖政治は暴君と専制君主の占有物として理解されていた。2月5日の有名な演説のなかで、ロベスピエールが恐怖と徳とを結びつけたのは、革命政府の歩みを他のあらゆる組織と区別し、過激な要求を忌避するためだった⁽⁴⁾。なお悪いことに「恐怖政治の体制」は、早くも1793年11月10日、エベール派に対抗して、議員バジール、テュリオ、シャボにより告発されていた。三者は、国民公會議員が革命的な「派閥」から守られるべきことを主張した。これにつづく討論において議員たちは、法が反革命派によって実施に移されているときでさえも、それに従わざるをえない必要に突き当たる。そこで彼らは、最近下された「ブリッソー派faction Brissot」(sic)の判決を例にとり、弁明を聞くことなしには、議員を訴えないことを決める⁽⁵⁾。どの場合を見ても、生じた出来事は決して恐怖政治と呼ばれることはなかった。

1794年4月4日(共和暦2年ジェルミナル15日)、セトSèteの人民協会の代表団が、「死を通常事態とする」ことを主張すると、彼らは国民公会の議場を追い出され、保安委員会に送還されえした。代表団は、もし自由を確立するのにそれが必要ならば30万人の殲滅をも辞さないというマラーの有名な言葉を持ち出した。そして請願者たちは、自由の木が「国王とその友人すべての血で肥沃になった国土に植えられる」ことを期待した。しかし、議会は「議場のあらゆるところで」この要求に反対し、議長は、「通常事態とすべきは死ではなくて正義だ」と叫んだ。彼は、共和主義者は「食人種」ではないのであり、先の言葉は「共和主義者にふさわしくない」と付け加える⁽⁶⁾。さらに驚かされる二つ目のエピソードは、共和暦2年フリュクチドール2日、ロベスピエールの死後わずかの後に繰り上げられたものである。その失墜に際して一定の役割を果たしたルシェという議員が、「公共の事柄」を防衛するために、恐怖政治を通常事態として維持すべきであると発言する。国民公會議員たちは、「正義」と叫んで、強制的にその発言を撤回させた⁽⁷⁾。いずれにしても、公安委員会の権力を以前よりも弱めた外には、国民公会の政策に変化がなかったことはまちがいない。どのように恐怖政治が定義され、それがロベスピエールにどう結びつけられたかを理解するために、あらゆる解釈を超えて諸事実を確立することに立ち戻るのではないならば、矛盾とまでは言えないまでも漠然としたこの言葉の用法を、いったいどのように理解できるというのだろうか。

2. プレリアル法

1794年6月10日(共和暦2年プレリアル22日)、クートンに続きロベスピエールは、肅清されなければならない「寛容派indulgentsの不道德な謀反心」なるものの存在を持ち出しつつ、革命裁判所の運営に関する重要な変更を国民公会で提案した。

たとえ国内に依然として反革命の危険があったとしても、たとえ外国に対する戦線が不安定だったとしても、この法律を「状況」から説明するのは明らかに難しい⁽⁸⁾。社会問題の争点を制御しながらも、民衆の不満の高まりをなすがままにし、反革命を一定の地域に限定しつつも、ヴァンデーの將軍たちの「勢力圏」を減らすことはできず、国内や県内の行政機関や戦間的な行政機関を監督しながらも、国家の決定の適用を管理することはできなかった。このように、政府の諸委員会のメンバーは、これほどまでに権力を持っていたことはなかったにもかかわらず、脆弱

だったのである。彼らは、形式上は権力の極みに到達していたとしても、軍事力と行政力の実践的な統制を欠いていた。この法律の論理的必然性は、状況のなかに探すべきではない。それは、むしろ国家の全体的編成の続行のなかに求めるべきである。

「祖国の敵」に対する裁判上の手続きは単純化される。革命裁判所へと出頭する被告は、この裁判所へと彼を差し向けた諸委員会のもとで事前に尋問されたはずと見做された結果、もはや尋問されなかった。弁護士を呼ぶこともできなかった。しかし、このことは歴史書によってしばしば忘れられている事実なのだが、非公式の弁護人に訴えることはできた。裁判官は審問において、物的証拠あるいは道徳的証拠さえあれば、証人から聞くことなく無罪判決または死刑の最終判決を言い渡すことができた。この法律は、激しい討論の末に可決された。一部の国民公会議員はその法律を認めた直後にこれを延期しようとした。なぜならばこの法律の潜在的な暴力を恐れたからであり、かつこの法律が新たな議員集団を排除しうる手段のように思われたからである⁽⁹⁾。討論の激しさが強調されるべきなのは、この法律の本文自体ではなく、様々な立役者たちの政治的立場と関係するようと思われるからである。この法律は、それに先立つフロリアル21日に委員会の同意のもとでオランジュの裁判所を生み出した諸法の延長だった⁽¹⁰⁾。それは、一方では革命裁判を中心化したヴァントーズの諸政令に、他方ではジェルミナル27日における公安の再組織に続くものである。この法律は、かつての諸政令の混乱、すなわち、国中で多かれ少なかれ自律的に動いていた多数の特別裁判所による諸政令の一貫性のない使用を、終わらせようとしていた。もしその狙いが人民の敵を鎮圧することだったとしても、カルノーはジェルミナルに同じ標語を用いていた⁽¹¹⁾。したがってこの法律は以前にあったものとの断絶ではないし、テルミドール九日のあとに全面否定されることはないだろう。

逆説的には、この法律は抑圧を軽くすると同時に重くするために制定されたと考えられる。それは明らかに、訴訟手続きを迅速にし、パリを舞台に繰り広げられた、暴力の露骨な特性をより有効に利用するものだった。この法律は、以前の諸法文のなかにすでに示されていた告発の道徳的側面を強調して、政治的な諸対立が重罪と認定されることを容易にした。だが同時に、排除の力学的な効果を縮小した。というのもこの法律は、たしか知識なく反革命に引き込まれた人々を無罪放免するからである。道徳的な基準を引き合いに出すことは、リヨンやナントでされたような、1793年3月19日の法の強引な施行を制限する。すでに4月には、ロベスピエールは、称号を買って貴族となった人々を告発してはならないとの考えを認めさせ、潜在的な犯罪者の数を永久的に増やさぬようにしていた⁽¹²⁾。諸決定の中央集権化の増大は、とくに地方での乱脈をコントロールしようとするものである。ロベスピエールは、1793年12月に無神論者を告発したにもかかわらず、驚くべきことに、議員ルキーニョが無神論を非難されたときには彼を守った。それに関しては、ルキーニョが、ヴァンデーでテュロー將軍の軍が犯した残虐行為を告発したばかりだったということを無論強調しなければならない。テュローは結局5月に軍の指揮権を失うことになる。この新たな対応は、何ヶ月も前から公安委員会が終わらせようとしていた組織化の試みの結果だったのである。

この裁判の組織化は、おそらく、よく制限されたうえに両義的なものであったが、ここで思い起こさなければいけないのは、公安委員会の実行手段はまだこのときには限られていたというこ

とである。公安委員会による命令の実施は、相変わらず緩慢かつ不確実で、とくにロベスピエールが地方へ介入することはたいへん少なかった。その演説の過激さだけが、彼に介入を許す唯一の手段であった。我々の見る限りこの法律は、斬新なシステムの誕生というよりも、それまでの数ヶ月に数々の暴力的で芳しからぬ振舞いを惹き起こしていた政治的対立から抜け出す可能性を与えてくれるはずの方法だった。

3. 暴力のバランス

この法律の置かれている政治的かつ策謀的な脈絡がそれに意味を与える。公安委員会は、1794年の春に初めて政治をコントロールすることができた。国民公会に後押しされてこの委員会が指揮した裁判所の真の諸変革の結果、「反対派」たるエベール派と寛容派は抹殺されたばかりであった。この動向はエベール派と敵対するものだったが、社会問題に対するあらゆる気懸かりをよそに、政治は強制的に国家の防衛に従わせられる。商業活動は必要不可欠であると宣言され、自律性を失ったサン・キュロットとパリの諸セクションは山岳派に支配され、物価高に抗議できなかった⁽¹³⁾。大臣職は公安委員会の影響下にある諸委員会に取って代えられた。革命軍は地方では最終的に廃止されて、派遣議員は議会の完全な支配下に置かれた。多くの者が、ロベスピエールの側近たちの報告の後でパリへと召還された。バラス、タリヤン、フレロンは従ったが、ジャヴォーグは激しく抵抗した。カリエはカルノーの支持を取り付けたうえで戻ってきた。象徴的な暴力までもが、ロベスピエール、バレールおよびダヴィッドによって統率された。彼らは若きバラの、続いてヴィアラの記憶を宣伝し、「革命の犠牲者たち」に捧げられている崇拜に対抗した。それは、間接的に理性の祭典へと通ずる。若者を革命的かつ軍事的に教育するエコール・ド・マルスも公安委員会に属した⁽¹⁴⁾。

「反対派」の抹殺は、短期的には、ロベスピエールと公安委員会の政治的勝利であり、かつ戦略的勝利だった。それは、カルノーの主導のもとに大臣職を諸委員会に置き換え、革命政府の中央集権化を確立させたことから始まった。エベール派の抗議していたことが彼らの抹殺とともに成立し、「人民」の代表であり化身たる国民公会議員たちの役割をいっそう強化した⁽¹⁵⁾。諸委員会は地方における「フェデラリスト」に対する告発の波を阻止しようとしていた。なぜならばその波は「フェデラリズムジャコバン」を先導するウルトラ革命派たちの利益になるからである⁽¹⁶⁾。その阻止を実現するためには、見せしめの罰を与えつつ、過激な指令を引き合いに出すしかない。ウルトラ革命派の指導者たちの消滅とバランスをとるために支払った代償は、寛容派の処刑であり、諸委員会や国際的な戦争支持者たちへの批判の終焉であった。貴族も同様に、彼らの移動の自由を制限する法律を通じて標的とされたスケープゴートだった。いずれにせよ、パリの人々が、1794年の7月に、ロベスピエールのいる市庁舎周辺へ集まらなかったことは、周知のとおりである。さらに1795年にはサン・キュロット的な活動家たちは、民衆運動の軍事的鎮圧に伴って永遠に役目を終えてしまう。この拡大しうる圧力のもと、国内は沈黙した⁽¹⁷⁾。革命は「凍結」する。

国内はもう一度、相矛盾した緊張に染まる。一方では、かつてないほどに政治の中心となった

道徳が、国内の政治的な軸となる。逆説的なことだが、この体制が生き残るために必要不可欠なのは力を使用することではなかった。そうではなくて、学校や建築、祭典や若者の道徳上の枠組みを通じて、啓蒙の普及に気を配ることであった⁽¹⁸⁾。他方で、個人的な打算と復讐は、国内の政治を形作るこの狭い世界のなかで、おそらくかつてないほど可能になる。ショーメット、マルゼルブ、デムーラン未亡人やエペール未亡人が死んだのは、そのためであった⁽¹⁹⁾。メニエが指揮しクートンに支持されたオランジュの委員会、ロベスピエールの支援を騙るルボンに主導されたアラスの裁判所、さらには、理想主義的な情熱に突き動かされ、ロベスピエールとの関係を頼りに裁判長ラコンブの方向転換に対抗する小ジュリアンがいるボルドーの特別裁判所が猛威を振るっていた。中央集権化はしたがって、完全なものではなかった⁽²⁰⁾。

4. 革命の終焉？

1794年の春、ジャコバン主義に由来し、厳密な代表制民主主義と結び付けられた政治的エリートたちによる権力の管理は、ついに実現したかのように見えた。矛盾しないいくつかの解釈が可能である。反対者と競合者たちが決定的に中心からはずされ、議会の権力が確立したいま、フランス革命は、人民と国民とを混同している国民公会と同一視された。1789年以来権力の中心に生まれていた不安定は止み、「政治階級」が革命と国民の一体性の擁護の周りに生まれはじめていた。政治は統治の行使だけに縮小させられ、その結果、社会的権利の要求に突き動かされていた活動家たちは周辺へと追いやられた。彼等はこの周辺への追いやりに関して、文士や弁護士、法律家そして最後に、1789年の革命を「成した」以後も地方行政と県政を牛耳っていた「名士たち」の先を行く。実際に政治に参加する限られた人々を除いた他の人々は、その管理あるいはお飾りの立場へと格下げされた状態に戻った。

この展開を説明するのに個人的利害の探求を引き合いに出す必要はない。タリヤンやバラスと同じ考えを持つ人々に個人的利害の追求という側面が存在していたことはたしかだが、もっと一般的に言えば、政治世界の職業化が進行しており、その結果、国家の政治文化は、権力の現実に立ち向かうことを受け入れた諸個人を一致団結させた。この過程は、「ジャコバン化」と呼ぶうるだろう⁽²¹⁾。暴力と表裏一体な力の使用は、初めは国王だけに割り当てられ国王からその代理人たちに割り当てられていたが、以後、国の中心化の脈絡で定義されるひとつの集団の占有物となった。この集団は、近代的な「政治的職業」を創始することとなった⁽²²⁾。次いで総裁政府は、この階級の周りで国を組織しようと試みるが、内的理由のために挫折する。統領政府と第一帝政は、一人のカリスマ的な人間に、国家の暴力を使用する権利を与えようと試みた。行政担当者のうち残りのものは、行政、管理あるいは公安に閉じ込められた。この観点において、山岳派と平原派の間を区別しても、あらゆる権力が集中する唯一の場所に昇格させられた国民公会の只中において国を指導することを受け入れた、全ての人々の客観的な同盟を説明することはできない。反革命派の脅威や敵の侵略やエペール派からの突き上げに対し、「ウルトラ革命派」に対し、あるいは寛容派の策略に対し、「シトラ[＝寛容派]」に対し、同時に民衆の要求や地方行政機関の自治に対し、紛れもなく優位に立っていた国民公会議員と公安委員会のメンバーたちは、教養とい

うよりもむしろ実践的な方針から、統一を必要とし、それを押し付けた。中道の極限について話すことができるだろうか。

いずれにせよ、登場人物たちの政治文化が、革命の当初から独裁者あるいは専制君主による権力の没収を、彼らに恐れさせていたということはまちがいない。国民公会が自らを人民の化身であるかのように定義するなかで、「独裁」の告発は、1794年の3月に「反対派」を打ち倒すのに役立った。そのうえこの政治的な再組織のなかで、三つの悩みの種が政府の一体性をふたたび問題にする。宗教の編成、戦争の動向、そして国家の永続性がそれである。

5. ロベスピエールの場合

ロベスピエールという人物は討論の中心に存在するようになり、この安定化への意志によって惹き起こされた矛盾的となるだろう。革命を衰えさせる可能性のあるあらゆることに反対したロベスピエールの断固たる決意は、社会の規律に対する彼の敬意、自然発生的な暴力をコントロールする意志、そして、彼の道徳的要求と結び付いていた。反対派と圧力集団のいないところでは、孤独さが彼の力となった。ロベスピエールの成功の秘訣とは、あらゆる難しい状況において、不可避で一時的な爆発を受け入れることになってでも、過激な言葉遣いとそれよりは和らいだ処置を組み合わせることだった。彼は、教義と実用主義を結びつけながら、他人の争いには口出しせず、彼にとってそうすることが必要なときには国民的な舞台から遠ざかることで、19世紀と20世紀の偉大な政治家に匹敵するほどの真のカリスマ的権力を持った⁽²³⁾。サン・キュロットに暫定的な場所を与え、ジロンド派と反革命勢力をギロチンにゆだねるという彼の作戦は、1793年の5月から6月、9月、そして12月には有効だった。1793年12月から1794年1月には、エスカレートする策謀の渦に飲み込まれることを避けるため、ロベスピエールはヴァンデー戦争に関する討論のなかでどんな地位も占めなかった⁽²⁴⁾。それにもかかわらず彼は、ジュリアンのような側近を介して、地方の現実をコントロールするという重要な役割を果たしていた。

全ては6月8日－五旬祭の日－の最高存在の祭典とともに急変した。5月7日、フランス人民が政令を通じて最高存在と靈魂の不滅を認めたこの日、ロベスピエールの地位は複雑なものだった。5月25日、彼は最高存在の儀式が組織されることに反対した。それは、「古い宗教儀礼」への回帰を避けるためであり、また、この時期には司祭たちが抑圧の対象だったにもかかわらず、カトリック存続の可能性を大衆に許してでも、信仰の自由という考えを相変わらず主張するためだった。したがってロベスピエールは厳密な意味ではこの祭典の先導者ではない。しかし彼は、少なくとも批判を受けるだけの中心的な役割を果たした。地方の革命家の多くは事実上、理性の女神と最高存在とを混同していたけれども⁽²⁵⁾、パリのエリートの間では、ロベスピエールが導入した断絶について思い違いをするものはいなかった。無神論とフィロゾフィスムの信奉者である革命家たちは、沈黙を強いられた状態にあったが、今後は、ロベスピエールに次第に反対するようになるフーシェのように、不道徳な人間の一員と見なされるおそれがあった。幾人かは公然とこの祭典への反対を表明し、より多くのものは偉大な司祭の姿となったロベスピエールの立場に衝撃を覚えた。なるほどロベスピエールの軌跡は、彼が一貫して追求していた道徳的な見地のうえに、

革命を定着させようとしているかのようである⁽²⁶⁾。しかし、ロベスピエールは、国民的エネルギーの政治的な統制に苦心していた国民公会議員たちの多くや、カルノーとりわけピヨ・ヴァレンヌのように、彼らにとって都合の良い路線から逸れることを恐れていた人々から、一段と孤立していた。道徳的指導者というロベスピエールの立場を説明するために、ある種の無知や夢想のようなものを仮定しても意味がない。彼のその立場は、国民公会の只中での孤立という弱みに由来していたのである。彼の役に立ったものが彼自身を打ち倒すことになるだろう。

同じ時期に、戦争はカルノーとサン・ジュストが衝突する機会となった。両者は、軍隊に与える教則や優先権、人選をめぐり対立する。サン・ジュストもまた、革命裁判所と公安の再編のなかで大きな役割を果たした。公安委員会は、工作員の監視を受け入れ、保安委員会の権限を侵害するような一般治安監察局を創設した⁽²⁷⁾。最後に、とくにサン・ジュストが造詣の深かった、市民教育の法典を起草するために、公安委員会のなかでのみ募られた新しい委員会が、クートンのイニシアティブで生み出された。ロベスピエールとサン・ジュストを緊密に結びつけるものはこの数ヶ月、何もなかった。にもかかわらず、委員会の他のメンバーたちの目には、政治的変遷の中での巡り合わせが二人を結束させており、いまや彼らの間にあらゆる国民的政治生活が集中しているように見えた。

6. 策謀その1

ロベスピエールはふたつの大きなエピソードに分けられる策謀に陥ることになる。政治的なバランスは多くの国民公会議員により変えられていた。一方では、ヴァディエやバレールのように、彼らの利益に沿う方向へと弾圧の行使をコントロールすることを欲したり、カルノーのように、ある部分、征服目的といえる戦争の指揮権を手中にとどめたいと望むものがいた。他方では、フーシェやタリヤンのように、今後は容認しがたいと判断された彼らの変節を忘れさせようとする者や、またもっとも多くの者のように、ギロチンへと送られる一団に含まれないうちに「恐怖政治を終わらせる」ことを試みるものがいた。二つの委員会の衝突は、ロベスピエールとピヨ・ヴァレンヌ、ヴァディエ、フーシェ、およびサン・ジュストとカルノーの間に見られた個人的対立ほど重要ではない。明らかに全員が革命の継続と革命裁判の中央集権化を望んでいたのだが、政治的安定をさぐる折衝は困難だったうえに、個人的対立がそこへ加わってきた⁽²⁸⁾。ロベスピエールの道徳的関心やサン・ジュストのほとんど形而上学的なそれは、政治的駆け引きのなかで議論をもてあそぶことには慣れていた委員会の他のメンバーたちを恐れさせたのだろうか。

政権の中枢にいたエリートたちによって暴力が策謀的に使われたことは、誰の目にも明らかである。たとえ明白な史料的証拠を見つけることは難しいとしても、告発、法律、事実、そして風聞の複雑な集まりが、この機構の中心にロベスピエールがいるということを示している。この機構は、エベール派と寛容派を失墜させ、政治的な転換点を節目づける策謀の後で、ロベスピエール自身を退場させることになるだろう。ヴァディエは、どのようにうまく立ち回るべきかを熟知していた。彼は、25日にこの法律が公布され適用されるより前の、プレリアル23日からすでに、何人かの彼の個人的な敵たちを直接革命裁判所へと送り、判決を下させる。次いで7月9日（メッ

シドール21日)、今度は反革命的行動を疑われていた農民たちを暫定的に釈放させたのである。最初のケースでは、ヴァディエはライヴァルであるアリエージュ県の人々を、彼らの事例が諸委員会によって吟味されることを待たずに処刑した。二番目のケースでは、彼は、寛大な態度を取りつつ、プレリアル法の危険性について指摘した。すなわち、巧みにも彼は、犯意と紛れもない事実との区別を主張し、告発されている諸事実は軽微なものだと述べて議会を説得し、プレリアル22日の法が、この農民たちを死に至らしめていたに違いない告訴を、彼らから免除するようにと主張した⁽²⁹⁾。このヴァディエの仲裁は、プレリアル22日の法の一義的な読み方をしている場合にのみ、驚かされるものとなる。法的仕事を準備すべき諸委員会の組織に付き従われることがなかったせいで、この法律はあらゆる横滑りを許してしまった。ヴァディエは意識的にそこに付け込み、ロベスピエールとクートンの権威を失墜させたのである。

そのときふたつのテロ行為めいたものが役割を演じた。それは前の5月22日と23日に、アドミラとセシル・ルノーが、それぞれコロ・デルボワとロベスピエールに対して行ったものだった。イギリスに操られたと非難されたこれらの陰の薄い人物たちに対して、迅速な訴訟手続きがとられた。さらに国民公会は、被害者たちの重要性を高めようとし、アドミラに傷つけられたジョフロワなる人物の犠牲的行為を誇張した。だがロベスピエールは、彼に仕掛けられた罠を見抜いてこのような誇張に反対し、自らがあたかも国父のように示されることを拒否した⁽³⁰⁾。しかし5月25日（プレリアル7日）、バレールはこれらの暗殺の企てに関する説明の機会に、人道humanitéの外に置くことを宣告した上で、イギリス人とハノーヴァー出身の戦争捕虜を処刑する政令を提案する。イギリス人とフランス人の関係の持続的悪化と潜在的なナショナリズムの発達が、この政令を、異議を挟む余地もないほどに正当化した。この提案のなかでバレールは、ロベスピエールを、イギリス側が暗殺しがっている人間として、あたかも、彼が国の主権者であるかのように述べた。ロベスピエールは、反イギリスの議論と、イギリス人民をも含めた、諸人民間の友愛への愛着との両立を心得ていただけに、二重にやっかいな存在であった。5月26日、彼はイギリス人全体を糾弾することを望まぬ一方で、専制君主や腐敗の潜在的な犠牲者であるフランス人の一般大衆と一つになった。6月21日、ロベスピエールは、イギリスの新聞が彼のせいにしているこの政令の生みの親であることを断固として否定した。彼は、衛兵に囲まれた「フランスとナヴァールの王」であるかのように扱われることを拒絶することで、論争が個人に集中するのを避けようとしつつ、信用できない国民公会議員たちが人民に引き渡されるべきことを巧みに結論づけた⁽³¹⁾。

7. 策謀その2

事実ロベスピエールは風聞の中心になっていた。ロベスピエールに敵意を持つフーシェが国民公会議長 の任期中であった6月15日（プレリアル27日）、ヴァディエは、警察が5月17日に投獄したカトリーヌ・テオという女性の手紙なるものを引き合いにだす⁽³²⁾。彼女は「聖母」を自称し、ロベスピエールを神の使徒と呼んでいた。この聖人伝はばかげているが効果的だった。ロベスピエールは、ルイ16世のかわりに王位につきたがっているとの、またのちには、タンブル塔に閉じ込められている王の娘と結婚しがっているとの嫌疑をかけられる。これらの風聞に対して

彼は、6月27日、あるセクションの祭典のなかで最高存在とテオ事件が誤って結び付けられたときに、介入した。しかし、保安委員会に率いられた捜査を阻止することはできなかった。そこで彼は、「エベール派」と「穏和派modérantiste」の策謀を告発する⁽³³⁾。「右派」同様に「左派」の敵対者たちが織り成す一連の中傷を断ち切り、敵たちを失墜させるために、ロベスピエールに残された手段はもはや、エベール派と寛容派に対するレトリックへ訴える以外にはなかった。彼は、法的手続きの凍結をはじめとした他のいかなる政治の手立ても禁じられていた。なぜならば、もしそれらの措置を取れば、彼は、自分が法を超越した存在であり、したがって専制君主であることを証明することになってしまうからである。

ロベスピエールの敵たちは、明らかに、巧みに行動していた。というのも、革命裁判所は死刑の数を突然、増大させるのである。6月17日（プレリアル29日）、アドミラとルノーを含むばらばらな54人の受刑者集団は、フーキエ・タンヴィルの命令のもと、親殺しに科される罰を想起させる赤いシャツをまといわれ、処刑台へと送られる。この人目を引くやり方は、まぎれもなく、「フランス人の王」ロベスピエールを暗示していた。つづく数週間のあいだに、人員過剰なパリの監獄のあちこちで「陰謀」が発見され、その結果、数多くの即時的判決がもたらされ、数日で250人以上の人々がギロチンにかけられた。フーキエ・タンヴィル、および、内務省に相当し、当時もっとも重要だった行政委員会の委員長であったエルマンは、そこで枢要な役割を果たす。明らかにヴァディエと近いこのふたりの人物は、これらの告発のなかでの彼らの役割も解明されぬまま、彼ら自身、1年後には処刑されるだろう。また、ロベスピエールの権威を失墜させ、とどめを刺すために、バレールに後押しされて保安委員会がおこした、プレリアル22日の法の「粗雑な行使」⁽³⁴⁾が確かにあった点を考慮に入れなければならない。事実、革命が国境同様、国内においても安定したように思われたときから、世論は、この死刑の加速を、ロベスピエールやクートンと結びつけるようになる。「死刑に対する嫌悪感」は、当時、そしてこれに続く歴史のなかで、ロベスピエールに降りかかるだろう。彼は、何ら対応策も見つけられぬまま、6月26日、および27日に、公然と独裁を非難される⁽³⁵⁾。危機の加速は急速だった。フルーリュスにおけるフランス軍の勝利は、事実上、カルノーの権力を強化する。6月29日、ロベスピエールとサン・ジュストは「独裁者」として告発された。長い沈黙を経て、ロベスピエールがフーシェおよび彼に買収された徒を非難する形で反撃したのは、7月9日と11日のことだった。16日、彼は軍事的勝利と1793年の憲法を祝う「民衆の宴会」を不法に組織した諸セクションにまで告発の範囲を広げるように仕向けられた⁽³⁶⁾。これらの集まりは、ともに革命政府を批判する「エベール派」と「寛容派」の立場を結びつけるものだと思われたのである。政治的進展と経済的不安を前にしたサン・キュロットの動揺は、もっとも保守的な人々による恐怖政治の取り消し要求と合致した。バレールは、あまりに多すぎる権力を横取りしている人々を非難する目的で、パリおよび諸委員会の緊張関係を巧みに操った。

ロベスピエールは、彼の立場がもたらす論理的結果に引きずられていた。そして、プレリアル22日の法が彼に跳ね返ってきた。テルミドール9日に、ロベスピエールおよびその補佐役の筆頭だったクートンやサン・ジュストが告発されたことは、エベール派や寛容派を死に導いた状況と類似していた。7月23日にロベスピエールがみせた、あらゆる和解に対する強硬な姿勢と、26日

の威嚇的な演説は、対立する人々を決然たる反対者へ変える結果となった。

8. 失墜

実際、ロベスピエールは7月26日（テルミドール8日）、議会の統制を失った。有名な彼の演説は、人心を糾合させることなく、不安を与えただけだった。告訴された彼は、人民の支持を彼のもとに糾合することができない。なぜならば、人民の正当性は、彼自身がそれを取り除くことに貢献したからである。そして、諸セクションへの呼びかけのせいで彼は、反革命派の側へと決定的に押しやられる。なぜならば、いまや彼は、徒党運動をリードしていると非難されうるからである。こうして彼は、かつてエベール派に対して張った罠へと陥り、武力に頼る以外は、あらゆる正当性を失う。ロベスピエールが彼を取り巻く全ての人々と同様に法の外へと置かれたことは、国民公会に保証されていた合法性を侵すことを恐れた砲手たちの支持を失わせる⁽³⁷⁾。彼は、そういうわけで、それまでの年月の中で間違いなく彼が育んできた烙印のメカニズムを被ったのである。

これに先立つ数ヶ月にわたる裏工作に終止符を打ったこの対決の局面で、ロベスピエールは、彼の周りにいかなる合法的な武力をも結集することができなかった。その最後の瞬間は、相変わらず謎に包まれている。彼は自殺しようとしたのか、それともーメダと改名したー憲兵メルダが彼の下あごを打ち砕いたのだろうか。彼は8日に、最高存在の祭典の日に身につけた青い衣服を再び着用するなどして、特別、装いに気を遣ったのだろうか。これらの詳しい説明に意味がないわけではない。なぜならば、その詳しい説明が、彼の運命の意味するところについて、歴史書の意見を分かれさせているのだから。ロベスピエールは「自滅的な」足取りに身を投じたのだろうか。それとも彼は「陰謀」の犠牲となったのだろうか。サン・ジュストは「冷静」を失い、力づくで「罠にはめられた」のか。それとも彼は、ロベスピエールとの意見対立にもかかわらず同じ政治的陰謀に飲み込まれたと考えることができるのか⁽³⁸⁾。

たとえそれが、完全に制御された政治的陰謀というよりひとつの結合の結果だったとしても、政治力の行使がなされたことは、ほとんど疑いようがない。国民公会議員たちはその後にく役割分担を直ちに決めてしまうのだから。抑圧は今後、国民公会議員たちの手の内にあった。ヴァディエやバレールが望んでいたように抑圧を延長しなければならないのか、それとも議員の多数派が望んだようにそれを弱めるべきなのだろうか。テルミドール10日すなわち7月27日⁽³⁹⁾のロベスピエールの処刑が、108人を排除する機会となったこと、国民公会が暴政に対する勝利を宣言し、1793年5月31日から6月2日のクーデタ前の政治生活に戻ったこと、これらのことは、裁判所の革命の現実をよく証明している⁽³⁹⁾。それは複雑な意味を持てはいるが、言われているほど謎めいてはいないと我々は信じたい。1794年およびその後、革命を恐怖政治と、恐怖政治をロベスピエールと同一視するのが得策だと考えた人々がすでに開いた道を利用するのは、あまりにも実用的すぎる。

9. 孤立の機構

テルミドール九日はひとつの政治の終わりではない。なぜならば、国民公会はその後も続いたし、抑圧的なメカニズムは再び動き出すからである。それは、しかし、重要で象徴的な転回点だった⁽⁴⁰⁾。

さしあたりは国民公会が国の解放と暴君の死を告げ、行政当局と政治クラブによってこうした常套句が繰り返され、プロパガンダは激化し、残酷、独断家、社会不適合者といった、後世に残るロベスピエールの人物像が作り上げられた。しかし、この攻撃は、予想もしなかった波及効果により拡張していった。革命裁判所や派遣議員のような制度は、根本的に刷新されたものの、維持された。ロベスピエールを倒した人々のうち、バレールやヴァディエのような委員会のメンバーは、「ロベスピエールの尻尾」に属する「血塗られた人間」として告発された。フーキエ・タンヴィルはプレリアル22日の法が放棄されると同時に逮捕され、わずか1年後には裁かれる。結合関係が急激に変化するこの不確かな時期において、非難の矛先は、もはや革命の名の下に反革命へ向けられたのではなく、革命そのものへと向けられた。その結果、抑圧的かつ中央集権的な政治の放棄を望む、あらゆる人々の複雑な再編成に直面して、行政府の中心化の支持者たちは、野党の側へと排斥される状況にあった。意見の対立は全く不明瞭で、生き残った「ジロンド派」が国民公会に復帰したのと同じ時期に、マラーが、迫害されたジャーナリストの象徴として、パントオンに祀られた。

流動的な状況のなかで、対立は政治的であるのと同じくらい象徴的だったが、この相反する力の絶えざる駆け引きのなかで、恐怖政治の犠牲者と国民的統一への回帰の周辺に新たな均衡が探された。マルセイユにおける反ジャコバン派の暴動は、ジャコバン派の名士たちの死を招き、「ロベスピエールの血塗られた支配」と同一視されたあらゆるクラブの廃止をもたらした。

ひとつの出来事が、あらゆる緊張を一点に集中させることになる。それは、奇跡的に死を免れ1年以上も収監されていた94人のナントの名士たちの訴訟であった。9月8日と10日に開かれた彼らの訴訟は、ナントにおいて、カリエおよび市の革命委員会の責任の下で行われた数々の所業を世間に知らしめた。新聞は、まさに激昂した。真偽の確かめようもない、明らかにでっち上げられた多くの証言が国を震撼させ、長く語られることになる伝説のもととなった。国民公会はそのメンバーの一人に対する告発を再び受け入れることにする。カリエは、複雑な訴訟手続きの果てに、国民公会から与えられていた権限を逸脱した廉で法廷に召喚された。民衆の運動は復讐を要求していたし、ジャコバン派と戦う「金色の青年たち *jeunesse dorée*」は評判になっていたが、なによりこの訴訟こそが重要な転機となった。カリエは恐怖政治を矮小化して地方の幾人かの革命家たちに諸々の責任を押し付けようとし、とりわけ、自分は国民公会の命令を課しただけだとほめかそうとした。それに対して法廷は、国民公会が抑圧的で急進的な措置を強要することは決してなかったとし、カリエの意向は革命の望むものではなかったと強く主張した。国民公会内および国内のどこからもカリエを支持する声はあがらぬまま、訴訟は故意に有罪へと導かれた。被告人の個人的性格と憤怒は彼の孤立を説明すると同時に、彼もまた、ロベスピエールと同じく、

恐怖政治から抜け出すのについてつけなスケープゴートであったことを示している。カリエは死を宣告され、12月16日、ナント出身の二人の人間とともに処刑された。他方で、被告に協力した他の者たちは無罪を宣告され、彼らの故郷へと戻り、過去を問われることがなかった⁽⁴¹⁾。この「政治的裁判」を通じて恐怖政治はロベスピエールとカリエの責任となった。この二人の人間の対立が思い出されたとしても、この事件が黙示録的残酷さを強調されたある独特な時期と同一視されたことを考えれば、それはまったく逆説的なことではない。

さらにまた深刻なことは、手稿のかたちで残された、ルキーニョのロベスピエール宛の報告が出版されたことである。そのなかでルキーニョは、ヴァンデー戦争のあいだテュローによって犯された蹂躪に抗議していた。公にされたこの本は、著者の意図とは全く逆に、ロベスピエールが常に非難していたこれらの残酷きわまる行為の責任をロベスピエールへと帰す手段となった。

10. 誰を信じればいいのか？

策謀はその張本人たちに跳ね返ってきた。ヴァディエとバレールのふたりについてだけ述べれば、彼らは抑圧的なやり方を、制御する場合に限っての話だが、これまでどおりに維持することを明らかに望んでいた。両者は実権を握ろうと何度も試みるが、権力は彼らのものではなくなる。当然の成り行きとして彼らは「テロリスト」のグループに含まれ、もはや議会でヘゲモニーを行使することはできない。革命の防衛は、以後、彼らへの敵対という形で現れる。国民公会の政治的均衡は決定的に片寄った。しかし逆に、政治的な抑圧や、警察による抑圧が消えることはないだろう。

国家的暴力の確立過程を一步ずつたどろうという姿勢は、諸々の要求に応えるものである。最初に、その発生状況も分からないような類の思考には頼らないのが望ましい。恐怖政治の定義は、それを大目に見ることができないほど、あまりにもテルミドール派の策謀と結び付いている。次に、国民公会と諸委員会によって組織された国家の暴力について、民衆の暴力あるいは戦争や反革命の暴力と密接に結びつけることなく話すことはできない。特殊な状況であったとか、ある種の正当防衛だったといった諸々の決議について弁解しようというのではない。ただ、存在していたのは系統だった暴力政策では決してなく、不断の追加決議と、確信のない適用の連続だったことを想起する必要がある。秩序だった思考の「体系」は決して存在していなかった。むしろ、それとは逆のことが歴史を支配したと言える。革命と同一視された国家を維持するためには、過激な法律を、様々な敵に対して不断に積み重ね、もし必要があればアンシャン・レジームから受け継がれた諸法を借りながらも、戦わなければならなかった。実際には決してそうでなかったにもかかわらず、一般にヴァンデーの人々と戦う決意を示すものだとされてきた1793年3月19日の法は、その前日、「農地法」の確立を望んでいた全ての人々に対する、同様に厳しい（死刑を要求する）法が制定されていた。言い換えれば、ウルトラ革命派と反革命派は一日ちがいで、相反する力の間でひとつの方向を維持することに心を砕こうとする議会によって、同じように扱われたのである。

11. 徳の政治の失敗

国民公会議員たちが裁判拔きの激しい処刑に反対しつつも、それが彼らにとって利益になるとときには放っておいたこと⁽⁴²⁾、ロベスピエールは「温和」でクーートンは「善良」であるという解釈が成り立つ一方、その彼らが自分たちの権威または沈黙で筆舌に尽くしがたい暴力行為を覆い隠したことは、驚くべきことではない⁽⁴³⁾。彼らの考える道徳的理由とはおそらく矛盾したものと妥協しそれを完全に受け入れてでも、なんらかの目標を追い求めた個人の例は歴史上に溢れている⁽⁴⁴⁾。だがその分析は、伝記作家あるいは、足跡を称賛したり非難したりしながら「説教じみた」歴史を構築したいと考える人々の興味しかそそらない。我々はこれとは異なる、単純とも思われるようなアプローチを優先した。駆け引きについて強調することは、実証主義的研究への回帰をもたらすものではない。そうではなく、政府当局が、1793年の9月の時点でも恐怖政治の法的な定義には関わらなかったことを強調したいのである。この言葉は、ただ言説のなかに存在するのみであり、政令や法律のなかに存在するのではない。それは手段化されたのである。それゆえ政治的論理の研究へと向かう必要があった。

バルナーヴ、ミラボー、マラー、ダントン、ロベスピエールといった幾人かの人間に、フランス人の相反する期待を具現化させてきた1789年以降の政治的論理が、どのようにして終点にたどり着いたのかを理解することはできる。一見、解決不可能な諸対立に應えるために、何らかの決断を要する他のすべての危機の時代と等しく、諸個人は解決策を体現していた。アメリカ合衆国において、ワシントンは、エリートと民衆階級のあいだにバランスを見つけることを知っていた。それゆえ彼は、暴力と反抗を抑えることに成功した。フランスでは、ロベスピエールは、諸計画というよりはむしろ諸原則を宣伝するモラルの革命を体現していた。1791年には、ロベスピエールは、君主政や共和政には無関心であることを宣言しており、市民の自由に対してしか重要性を認めなかったにもかかわらず、1年後には、国王死すべしと書いた⁽⁴⁵⁾。闘争が不確かなものであり、競合する諸グループ間のバランスが同盟を通じて再構成される間は、彼は、中央集権的で統一された国家の確立を望む人々すべてを、糾合することができた。しかし、この目的が達成された後には、ロベスピエールは、真に政治的に国家運営をする人々にとって、障害物どころか危険な存在となった。彼らは、度重なる排除を経て選ばれたばかりの、政治階級のメンバー全員によって認められていた自然法の考えを、国家の現実に取り入れることを受け入れていた。予想外な—しかし実は予想できたはずの—逆転現象により、ロベスピエールに対して作動させられた装置は、権力を担った政治階級が座する極めて限定された中心部分には留まらず、国中に達し、新たな諸事件の読み直しを惹き起こした。

陰謀と策略について強調するからといって、古い実証主義的研究への回帰をはかろうとしているのではない。個人的な闘争の歴史、経済活動の歴史、復讐の歴史は、依然として歴史研究の対象となることを忘れないでほしい。この現実の一部を抜きにしては、思想史と政治論争の歴史はちぐはぐなままである⁽⁴⁶⁾。かつて革命史が重視していたこの個人的次元には、我々が時間をかけるだけの価値がある。個人の打算や駆け引きから、いわんや心理学上の分析から諸事件を説明

しようと望んだところで不十分なものとなることは間違いない。しかし、それらがどんな形であろうとも、諸構造のみに依拠しては、危機に際して決定的な当事者たちの働きを説明できない。ロベスピエールの「残虐さ」によっても、周囲の「ルソー主義」によっても、起きたことは説明できない。当時、明らかに、ロベスピエールが革命をもっともよく「体现」しており⁽⁴⁷⁾、諸力が均衡する「場所lieu」を象徴していた⁽⁴⁸⁾。「場所」という言葉はJ・スコットからインスピレーションを得ている。スコットは（活動家である女性たちを例に）個人の人格を、（歴史的という言葉をつけ加えて歴史的場所と言っても良いであろう）「場所」（英語ではsite）として理解することを提案した。このアプローチは、「（彼らの）行動（英語ではagency）を決定付ける多くの要因、および歴史上の登場人物たちが形成されていく道の多様性と複雑さ」について考えさせる⁽⁴⁹⁾。登場人物たちの辿った道を配置や連関と混ぜ合わせるこの観点にもしも立つならば、他の全ての人文諸科学に対して歴史叙述に独自性を与える、人間的な意図というものを、諸構造と諸事件のあいだに組み込むことが可能のように思われる⁽⁵⁰⁾。

あらゆる弁解的もしくは党派的な固定観念から離れれば、ロベスピエールが、1794年の春から地方に分散していた、革命的暴力を止めようと望んでいたと考えるのは妥当なことだろう⁽⁵¹⁾。彼は、革命を自分の考えに応じて指導するために、そのときまでは見事に、野心家や皮肉屋、あるいは単に現実主義的な人間たちと妥協的関係を作り上げていたが、ついにはその犠牲者となった。ロベスピエールは、この目的のなかで彼が有罪とした全ての人々の列に加わる羽目になる。明らかに彼は、国家の正当性の、その絶えざる追求の犠牲者である。この正当性は、主権と権力の受託者と判断された議会における、彼の演説を通して体现されていたのであり、ロベスピエールは、暴力の行使から生まれ、潜在的な主権の源を拠り所とする他のあらゆる要求に対して、議会の基礎を固めるのに貢献したのである。委員会のメンバーの手中に暴力の管理を全て集中させてきた彼は、最後の年に、権力の拡散を条件とする恐怖政治からの脱出に手をつけた。だがロベスピエールは、彼自身とごく少数の集団の手に集中させることで暴力がむしろ倍加するのではないかという不安を招いた。このような計画を根拠に彼を非難することは、おそらく見当違いなことである。彼のものの見方は、明らかに、政治的というよりもむしろ道徳的であり、それどころか神秘的なものだった⁽⁵²⁾。しかしこの行動は、その実際上の結果を論理的に危惧していた人々、および、より月並みに、権力を自分自身とその所属する集団のために利用しようと思っていた人々を怯えさせたただけだった。

註

- (1) P. Guéniffey, *La politique de la Terreur*, Fayard, 2000, ed. poche 2003.; C. Mazauric, "Terreur", in A. Soboul (dir., J.-R. Suratteau), *Dictionnaire historique de la Révolution française*, PUF, 1989; S.F. Scott et S. Rothaus, *Dictionnaire*, Greenwood Press, 1988, p. 942-6.; F. Braesch, 1789, *L'Année terrible*, NRF, 1941, p. 18.を参照。
- (2) この点についての省察は、近日刊行予定の著作とその他二つのシンポジウムにおける報告で続く。このようにいくつかの部分に分けられ発表されるのは、このテーマに重要性を認めているからであり、かつ、研究者たちの批判や意見を受けるためである。

- (3) 一例を挙げるにとどめよう。R. Palmerは、1989年の著書 *Le gouvernement de la terreur* (A. Colin) の後半の数章で、その役割について全く述べていない。
- (4) A. Aulard, *Histoire politique de la Révolution française*, Colin, 1909, p. 358-9.
- (5) AP, T. LXXVIII, p. 704-707.
- (6) AP, XXX, 15 germinal an II, 4 avril 1794, n° 38, p. 1445-6.
- (7) Aulard, *Histoire politique de la Révolution française*, p. 593.
- (8) 微妙な違いはあるが、G. Lefebvre, "Sur la loi du 22 prairial an II", *AHRF*, 1951, p. 225-256. を参照。
- (9) F. Brunel, 1794, *Thermidor*, Bruxelles, Complexe, 1989, p. 64-69. ; B. Bacsko, *Comment sortir de la Terreur*, Gallimard, 1989, p. 52-53.
- (10) A. Mathiez, "Robespierre : l'histoire et la légende", *AHRF*, 227, 1977, p. 27.
- (11) M. Eude, "La loi de prairial", *AHRF*, 254, 1983, p. 545-559.; E. de Mari, *La Mise hors-la-loi sous la Révolution française 19 mars 1793 - 9 thermidor an II*, thèse de droit., doct. Université de Montpellier, 1991.; Aulard, *Histoire politique de la Révolution française*, p. 366.
- (12) Robespierre, *Œuvres*, Phénix éditions, 2000, T. 10, p. 441.
- (13) Mathiez, *La vie chère et le mouvement social sous la Terreur*, 1973, II, p. 212-223.
- (14) *La Mort de Bara*, Musée Calvet, 1989. ; J.-C. Martin, *Révolution et Contre-révolution en France de 1789 à 1989*, Rennes, Presses universitaires, 1996. ; "Nantes et la chouannerie bretonne", in *Nantes-Histoire, Nantes et la Bretagne*, Skol Vreizh, p. 105-112.
- (15) J. et N. Dhombres, *Lazare Carnot*, Fayard, 1997, p. 379以下。
- (16) Congrès de Poitiers, *Existe-t-il un fédéralisme jacobin?*, CTHS, Actes du 111^e congrès des Soc. Sav. 1986. ; Eude, "Le Comité de Sûreté générale en 1793-1794", *AHRF*, 261, 1985, p. 298.
- (17) Mari, *La Mise hors-la-loi sous la Révolution française*, p. 438-442.
- (18) R. Palmer, *Le gouvernement de la terreur*, p. 284-290.
- (19) G. Dussert, *Vadier, le grand inquisiteur*, Imprimerie nationale., 1989, p. 152-154. ; E. Campardon, *Le tribunal révolutionnaire de Paris*, Plon, 1866, T. II, p. 217-225.
- (20) Mari, *La Mise hors-la-loi sous la Révolution française*, p. 580-595.
- (21) Brunel, 1794, *Thermidor*, p. 34.; P. Rosanvallon, *Le modèle politique français: la société civile contre le jacobinisme de 1789 à nos jours*, 2004.
- (22) M. Weber, *Le Savant et le Politique*, Plon, (1^e ed 1959), 2002, 10-18. ドイツ語の表題はより暗示的に *Politik als Beruf* (『職業としての政治』) となっている。
- (23) I. Kershaw, *Hitler, essai sur le charisme en politique*, Gallimard, 1995. ナポレオンやド・ゴールが想起されよう。
- (24) J.-C. Martin et X. Lardière, *Le massacre des Lucs, Vendée 1794*, La Crèche, Geste ed., 1992.

- (25) Mathiez, "Robespierre : l'histoire et la légende", *AHRF*, 227, 1977, p. 22-23. ; B. Cousin, M. Cubells et R. Moulinas, *La pique et la croix*, Centurion. 1989. ; M. Vovelle, *La Révolution contre l'Église*, Bruxelles, Complexe. 1988, p. 186-190.
- (26) A. Rey, *Révolution: Histoire d'un mot*, Gallimard, 1989, p. 116.
- (27) Palmer, *Le gouvernement de la terreur*, p. 274-275.
- (28) Eude, "Le Comité de Sûreté générale en 1793-1794".
- (29) Campardon, *Le tribunal révolutionnaire de Paris* , p. 344-347, A. Legrandに感謝。 ; Dussert, *Vadier, le grand inquisiteur*, p. 180-181 ; Eude, "La loi de prairial".
- (30) A. J.F. Bonnemain, *Les Chemises rouges*, Paris, 2 vol, 1799. ; Bacsko, *Comment sortir de la Terreur* ; M. Bélissa et S. Wahnich, "Les crimes des Anglais, trahir le droit", *AHRF*, 2, 1995, p. 233-249. ; A de Baecque, *La Gloire et l'Effroi*, Grasset, 1997, p. 149-178. ; O. Blanc, "Aux origines du 9 Thermidor", in J.-P. Bertaud (et al.), *Sur la Révolution, approches plurielles, Mélanges M. Vovelle*, Société des Etudes Robespierristes, 1997, p. 262-270. ; Wahnich, *L'Impossible citoyen*, A. Michel, 1997, p. 237-327. ; Robespierre, *Œuvres* , T. 10, p. 472-473.
- (31) Robespierre, *Œuvres*, T. 10, p. 473-477 および p. 498-501.
- (32) Eude, "Points de vue sur l'affaire Catherine Théot", *AHRF*, 198, 1969, p. 606-629. ; Dussert, *Vadier, le grand inquisiteur*, p. 171-177.
- (33) Robespierre, *Œuvres*, T. 10, p. 504-511.
- (34) 例えば、Y. Bosc, F. Gauthier et S. Wahnich, *Pour le bonheur et pour la liberté*, La Fabrique, 2000, p. 326.
- (35) J. M. Thompson, *Robespierre*, Oxford, Basil and Blackwell, 1935. ; Dussert, *Vadier, le grand inquisiteur*, p. 178-187.
- (36) J. M. Thompson, *Robespierre*, p. 242.
- (37) Mari, *La Mise hors-la-loi sous la Révolution française*, p. 597-600.
- (38) B. Vinot, *Saint-Just*, Fayard, 1985, p. 299, p. 317-320.
- (39) Bacsko, *Comment sortir de la Terreur* . ; Brunel, 1794, *Thermidor*.
- (40) Bacsko, *Comment sortir de la Terreur*.
- (41) Bacsko, *Comment sortir de la Terreur*, p. 190-254. ; J.-C. Martin, *La Vendée et la France*, Le Seuil, 1987, p. XX ; C. Gomez-Le Chevanton, *Carrier et la Révolution française en 30 questions*, La Crèche (79), Geste éditions, 2004. ; M. Ozouf. 絶対に忘れてはならないのは、革命と同一視されたカリエの告発の継続も考慮に入れなければいけないということである。A. Gérard, "Par principe d'humanité". *La Terreur et la Vendée*, Fayard, 1999. ; J. Dupaquier, *Carrier : le procès d'un missionnaire de la Terreur et du Comité révolutionnaire de Nantes*, Pontoise, les Etablets, 1994. これについては引用著書に多くの文献が見いだされる。
- (42) Mari, *La Mise hors-la-loi sous la Révolution française*, p. 280.

- (43) Mathiez, "Robespierre : l'histoire et la légende" ; M. Morineau, "Mort d'un terroriste...", *AHRF*, 252, 1983, p. 335-339.
- (44) J. Derrida, *Mémoires pour Paul de Man*, Galilée, 1988.に例示。
- (45) Aulard, *Histoire politique de la Révolution française*, p. 182, 235.
- (46) Blanc, *La dernière lettre*, Pluriel, 1984, p. 108 以下。
- (47) F. Furet et Ozouf (dir.), *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Flammarion, 1988.の見解。
- (48) J. Solé, "Robespierre, apologiste de la Terreur, août 1792-juillet 1794", in P. Glaudes, *Terreur et Représentation*, Grenoble, Ellug, 1996, p. 49-62.
- (49) J. Scott, *La Citoyenne paradoxale*, Albin Michel, 1998, p. 35.
- (50) Colloque Bielefeld
- (51) G. Rudé, *Robespierre, Portrait of a Revolutionary Democate*, Londres, Collins, 1975.を参照。
- (52) H. Guillemin, *Robespierre politique et mystique*, Seuil, 1987.